

鳥取市

横 枕 古 墳 群
発 掘 調 査 概 要 報 告 書

姫鳥線整備促進関連事業に係る
横枕38・40・41号墳の調査

2004

財団法人 鳥取市文化財団

鳥取市

横 枕 古 墳 群
発 掘 調 査 概 要 報 告 書

姫鳥線整備促進関連事業に係る
横枕38・40・41号墳の調査

序 文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しておりますが、近年の各種開発事業に伴って発掘調査が必要となり、消えていく遺跡もあるのが現状です。しかしながら埋蔵文化財はその地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人 鳥取市文化財団では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めているところです。

さて、ここに報告いたします横枕古墳群の発掘調査事業は、中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業に係る埋蔵文化財発掘調査として鳥取市教育委員会の指導のもとに平成15(2003)年度に実施したものです。この古墳群は千代川左岸の丘陵上から丘陵裾に展開しておりますが、近年開発に伴う発掘調査が急速に進み、50基にものぼる古墳や多くのその他の遺構が検出・調査され、縄文時代から古墳時代にかけての土器や玉類、金属器等が多数検出されました。今回の調査では3基の古墳と土壙等が検出され、この地域の古代文化の一端を明らかにする貴重な資料を提供してくれました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様をはじめとして関係の皆様に広く活用していただければ幸いです。

おわりになりましたが、今回の発掘調査に際し、深いご理解とご協力を賜りました地権者ならびに地元の皆様をはじめ関係の皆様に心から感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 鳥取市文化財団
理事長 石谷雅文

目

序文	
目次・例言	
1 はじめに	1
II 遺跡の位置と歴史的環境	2
III 発掘調査の概要	4
1. 横枕38号墳	4

挿図 目次

第1図 横枕古墳群周辺遺跡分布図	3
第2図 横枕38号墳周辺調査地地形図	5, 6
第3図 横枕38号墳周辺調査地遺存図	7
第4図 横枕40・41号墳周辺調査地地形図	9, 10
第5図 横枕40・41号墳周辺調査地遺存図及び横枕40号	

図版 目次

PL1.1. 調査地遠景航空写真(東南東上空から)	
2. 横枕38号墳周辺調査地遠景(南東から)	
3. 横枕40・41号墳周辺調査地遠景(北西から)	
PL2.1. 横枕38号墳周辺調査地調査前(東から)	
2. 横枕38号墳周辺調査地調査後(南南東から)	
3. 横枕38号墳墳丘断面(南から)	
PL3.1. 横枕40号墳周辺調査地調査前(南西から)	
2. 横枕40号墳周辺調査地調査後(西南西から)	
3. 横枕40号墳墳丘断面(北東から)	
PL4.1. 横枕40号墳西南西側周溝部断面(南東から)	
2. 横枕40号墳北東側墳裾部遺物出土状況 (北東から)	
3. 横枕41号墳周辺調査地調査前(北東から)	

例 言

1. 本書は、姫鳥線整備促進事業に伴って実施した横枕古墳群の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、財団法人 島取開発公社の委託を受けて、財団法人 島取市文化財団 島取市埋蔵文化財調査センターが島取市教育委員会の指導のもとに実施した。
3. 調査地は丘陵上と裾とに分かれ、所在地は、それぞれ島取市横枕字天王谷・同上味野字小屋場ノ一と同横枕字總ノ尻下・同横枕字天王谷・同上味野字堤下タである。
4. 実測図・図版等の作成は、調査に参加した全員の協力を得て山田・神谷が行い、高垣が補佐した。
5. 本書の執筆・編集は山田が行い、神谷・前田・高垣が補佐した。
6. 調査によって作成された記録類および出土遺物は島取市教育委員会に保管されている。
7. 現地調査から報告書作成に至るまで多くの方々からの協力、指導ならびに助言をいただいた。記して厚く感謝いたします。

島取県土整備部道路課、島取県姫路島取線用地事務所、財団法人 島取開発公社、西尾 功、
門前 実、久保智康
(順不同、敬称略)

次

2. 横枕40号墳	8
3. 横枕41号墳	8
4. その他の遺構	15
1) SK-01	15
2) 溝状遺構	17

報告書抄録

墳丘断面図、ピット状遺構断面図	11, 12
第6図 横枕41号墳墳丘断面図	13, 14
第7図 横枕41号墳出土遺物実測図	15
第8図 SK-01実測図	16
第9図 SK-01出土遺物実測図	17

目次

PL5.1. 横枕41号墳周辺調査地調査後(北東から)	
2. 横枕41号墳周辺調査地調査後(南西から)	
3. 横枕41号墳周辺調査地調査後(南東から)	
PL6.1. 横枕41号墳出土遺物	
2. P-2断面(上)、完掘状況(下)(北北西から)	
3. P-3断面(上)、完掘状況(下)(南東から)	
PL7.1. SK-01検出状況(北西から)	
2. SK-01縦断面(南東から)	
3. SK-01掘り下げ状況(南東から)	
PL8.1. SK-01内遺物出土状況(左／南西から；右／南東から)	
2. SK-01出土遺物(1)	
PL9.1. SK-01出土遺物(2)	

I はじめに

1. 調査に至る経緯・調査の経過

横枕古墳群は、鳥取市横枕・上味野・竹生地内の標高30~150m程度の丘陵上およびその裾部に形成されている古墳群である。周辺では古くから山裾部に露出したいくつかの横穴式石室が知られていていたが、その後の県教育委員会の分布調査等によって大小様々な古墳50基余りが確認されるとともに、周辺平野部にも遺物散布地が認められ、便宜上これらにも横枕所在遺跡との仮称が付されている。この地域での発掘調査は、平成11年に浄水施設整備事業に伴って当該古墳群の調査が初めて本格的に実施され、それ以降、中国横断自動車道 姫路鳥取線整備事業によって急速に進みつつある。

今回の発掘調査もこの姫路鳥取線整備事業に伴うもので、事業では横枕集落の前面に広がる平野・低丘陵から集落北東の丘陵裾にかけて路線が計画されている。当初当該地区内周辺には上述のとおりいくつかの古墳が認められていたが、鳥取市教育委員会によって平成10年度から周辺の分布調査が再度実施され複数の古墳や遺物散布地が確認され、平成12年度には試掘調査も行われて須恵器等の遺物が出土するとともに古墳の盛土や土坑・溝状構造等が検出された。その後これらの結果をもとに当該地区内の埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関の間で協議・検討が重ねられたが、路線内の遺跡は現状での保護・保存が難しく、記録保存で対応することとなった。

これまでの調査は、平成12~14年度に集落前面の低丘陵上の遺跡について財団法人 鳥取開発公社の委託を受けた財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センターが実施したが、平成15年度についても、同公社の委託を受けて、同センターが引き続き調査を実施した。

今回の調査地は横枕集落の北東側丘陵上および丘陵裾に分かれるが、調査は平成15年11月に伐闇に着手した。伐闇後、丘陵上の調査地は、以前の隣接調査との整合性を持たせるため、2基の古墳の中心を結ぶラインにかつての測量杭を復元再設定・延長して基準ラインを設け(C35、C39~C42杭)、そのラインに直交あるいは角度を振ってその他の杭を設定した。また丘陵裾の調査地は、調査地に現存する段にはば並行する基準ラインを壇丘上から任意で設け(C0~C2杭)、C1杭を中心にこのラインと直交するライン上にその他の測量杭を設定した。その後、業者委託による現況の地形測量を行うとともに資材を搬入し、丘陵裾の調査区の表土除去から調査を進めた。

その結果、丘陵上の調査区では古墳時代中期末から後期前葉墳とみられる円墳1基(41号墳)と時期不明の円墳1基(40号墳)およびピット状遺構(P-1・2・3)が検出され、丘陵裾の調査区では調査範囲が狭小のため詳細不明の円墳1基(38号墳)と鎌倉時代初頭頃とみられる土壙(SK-01)や時期不明の溝状遺構が検出された。なお41号墳については、平成13年度に南西端部が一部調査消滅しており、また38号墳とその他の遺構および40号墳についてはいずれも調査対象地の境界が墳丘上や遺構上にくるため、対象地内で可能な調査を行った。こうして降雪等によって一時調査の中断もあったものの、各種記録類を作成して平成16年3月に現地調査を終了するとともに現地調査と並行して記録類の整理、出土遺物の整理を行い、報告書作成作業を行った。

2. 調査の組織・体制

発掘調査の組織・体制は以下のとおりである。

調査主体 財団法人 鳥取市文化財団

理事長 石谷雅文(副市長)

副理事長 中川俊隆(教育長) 三田三香子

常務理事・事務局長 小谷莊太郎

調査指導 鳥取市教育委員会 庶務課 文化財室

事務局 財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター

所長 前田均
調査事務 秋田澄世
調査担当 調査員 前田均 山田真宏
調査補助員 神谷伊鈴 杉本利子 矢芝泰伸 水田りん太郎 高垣恵巳子

II 遺跡の位置と歴史的環境

1. 横枕古墳群の位置

鳥取市は、鳥取県東部に位置する山陰の中核都市の一つで、平成16年2月現在で、面積237.20km²、人口15万2千人余りを擁する県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担っている。また現在は近隣の9町村との間で合併協議がなされており、人口20万人を超える特例市としてさらなる発展を目指している。地理的には、市の北側には日本海とそれに臨む広大な鳥取砂丘が広がり、中央部には中国山地に端を発する千代川が北流する。市域の中心はこの千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占め、この平野の周縁部は丘陵地となっている。

今回の調査対象である横枕古墳群は、鳥取平野南西部に面する標高30~150m程度の丘陵上、裾部およびその前面の独立丘陵に立地する。JR鳥取駅からは主要地方道鳥取鹿野倉吉線から主要地方道鳥取河原線を経由して南西方向に約6kmで、横枕集落の後背から北東部およびその前面に位置する。所在地名は鳥取市横枕、上味野、竹生である。この周辺では、約3kmほど北側に昭和60(1985)年の鳥取国体を契機として国道29号線(旧国道53号線南北バイパス)が整備されたことから次第に開発が広がり始め、近年では浄水施設整備や本調査の契機である道路整備事業が進展しており、今後開発が加速度的に展開しその現風景が一変する可能性も考えられる。

2. 横枕古墳群の歴史的環境

鳥取平野において人々の最初の足跡が認められるのは千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採取された黒曜石製の有舌尖頭器で、詳細は不明ながら旧石器時代にまで遡る可能性を持つ遺物である。縄文時代では市域の西端部、白兎海岸から南へ約1kmの丘陵裾部から前期中頃や後期の土器が採取された(内海中所在遺跡)他、横枕古墳群の千代川を挟んだ対岸の丘陵上に立地する美和32・33号墳の盛土下層から前中期の土器が僅かに検出されている。また、市西部の湖山池南東岸の低湿地には、現在のところ前中期を初源とする桂見遺跡や中期の土器も出土している東桂見遺跡、布勢第1遺跡が立地するとともに湖山池に浮かぶ青島遺跡では磨消繩文の浅鉢など多くの土器が出土し、とともに後期を中心とした低湿地遺跡群として知られる。横枕古墳群周辺では、2kmほど北の本高段木遺跡から二次堆積と見られるものの晩期の突帯文土器が、その1kmほど北の山ヶ鼻遺跡からは後期後葉から晩期前葉の土器群が、さらにその1kmほど北の千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡からは晩期の突帯文土器が出土している。

弥生時代に入ると縄文時代から引き続き営まれた湖山池南東岸の遺跡群の他、掘立柱建物や水路・水田、各種多彩な遺物が検出された鳥取平野中央部の岩吉遺跡、千代川東岸の西大路上居遺跡から前期の遺物が検出されており、それ以降その他に古海、菖蒲、山ヶ鼻、服部、秋里、帆城、湖山第2、布勢第2、大柄、北村恵儀谷等の遺跡が営まれ、後期にはその数が飛躍的に増加する。またこれらの遺跡の外縁丘陵部に位置する西桂見遺跡や桂見、布勢鶴指奥、服部の各墳墓群には墳丘墓や土壙墓が築かれている。古墳時代の集落遺跡の調査事例は少ないが、現在のところ古墳の立地する丘陵裾の微高地上等に、あるいは現集落と重なって営まれたものと考えられている。弥生時代から続くものとしては、湖山池周辺の遺跡群があるが、今のところいずれも大集落ではなく微高地上に住居跡が点在する状況である。古墳に目を向けると、鳥取平野周辺部の丘陵上に大小様々な古墳が造営される。このうち千代川左岸の湖山池周辺では、弥生時代からの系譜を引くと見られる小規模な方墳を主体とした桂見古墳群、倉



1. 施作古墳群
2. 金井古墳群
3. 桂原古墳群
4. 仲原古墳群
5. 市代古墳群
6. 大塚古墳群
7. 野村古墳群
8. 佐久間古墳群
9. 也尾古墳群
10. 古南古墳群
11. 本高古墳群
12. 小高古墳群
13. 小森古墳群
14. 下林古墳群
15. 上林古墳群
16. 上林二号墳
17. 犬山古墳群
18. 須花古墳群
19. 下林房古墳群

20. 錦田古墳群
21. 芦津古墳群
22. 三井古墳群
23. 上谷古墳群
24. 朝来古墳群
25. 朝来古墳群
26. 井手古墳群
27. 木下古墳群
28. 八坂古墳群
29. 国取古墳群
30. 熊野古墳群
- A. 東祖見道路
- B. 布勢第1道跡
- C. 布勢第2道跡
- D. 布勢古墳群
- E. 布勢古墳群
- F. 小森古墳群
- G. 下段道路

- H. 北村惠信古道跡
- I. 山ヶ森道路
- J. 通潤道路
- K. 通潤道路
- L. 木立門ノ坂道跡
- M. 旗部道路
- N. 旗部所在道路
- O. 旗部所在道路
- P. 旗文道跡
- Q. 旗文所在道路(國)
- R. 旗文所在道路
- S. 旗文所在道路
- T. 旗木道路
- U. 流谷道路
- V. 伊勢谷道路
2. 松ヶ谷横穴
- b. 新山城跡
- c. 新山城跡
- d. 新山城跡

- d. 横間1分墳
- e. 古湧35号墳
- f. 下林房23号墳
- g. 中村所在道路 1
- h. 中村所在道路 2
- i. 中村所在道路 3
- j. 中村所在道路 4
- k. 中村所在道路 5
- l. 中村所在道路 6
- m. 旗部所在道路
- n. 旗部所在道路
- o. 旗木所在道路
- p. 旗木所在道路
- q. 旗木所在道路
- r. 旗木所在道路
- s. 望水所在道路
- t. 本高所在城跡
- u. 旗木所在城跡
- v. 古湧家1号墳

- 一例一
- (○) 旗部道路、造物散布地
 - (○) 墓葬群・古墳群
 - (●) 主要古墳
 - (▲) 横穴
 - (■) 城跡

第1図 横枕古墳群周辺遺跡分布図

見古墳群の他、服部、釣山、古海、徳尾、下味野、横枕他に多くの古墳が造営される。前方後円墳としては古くて大規模な里仁29号墳(85m)、柄間1号墳(92m)から布勢1号墳(59m)、大熊段1号墳(46.5m)、三浦1号墳(36m)等が点在し、新しくて小規模な桂見6号墳(24.5m)、釣山2号墳(26.4m)等も造られる他、古海36号墳(67m)のような前方後方墳も認められる。また千代川右岸では平野の南側丘陵に古墳時代全般を通して築造され、因幡地域最古の前方後円墳とされる六部山3号墳(63m)や古郡家1号墳(90m)等が点在する他、橋本、美和、八坂、越路、広岡、空山、紙子谷、生山他のが古墳群が形成されている。歴史時代になると、湖山池南東部周辺には古代山陰道、駅街、郡衙が推定されており、律令期の鳥取平野の中心的地域であったと考えられている。また『東大寺東南院文書』からもこの周辺が東大寺領「高庭庄」として開発されたことを読み取ることができる。遺跡としては現在塔心礎が残る菖蒲庵寺、墨書き土器の検出された菖蒲遺跡や山ヶ鼻遺跡、多量の墨書き土器や綠釉陶器・木簡・祭祀具等が検出された岩吉遺跡等が知られ、その他に千代川対岸で墨書き土器や奈良三彩小壺他の検出された古市遺跡等が知られる。中世以降では15世紀に湖山池東岸の天神山に因幡守藤山名氏が城を構え、久松山島取城へ移るまで因幡支配の拠点とした。横枕周辺では山名氏の家臣であった武田氏の拠城である鶴尾城や倭文城他が丘陵上に形成され、本年度調査された倭文城では堅堀、横堀や土塁、堀切等が検出されている。

III 発掘調査の概要

横枕古墳群(PL1)

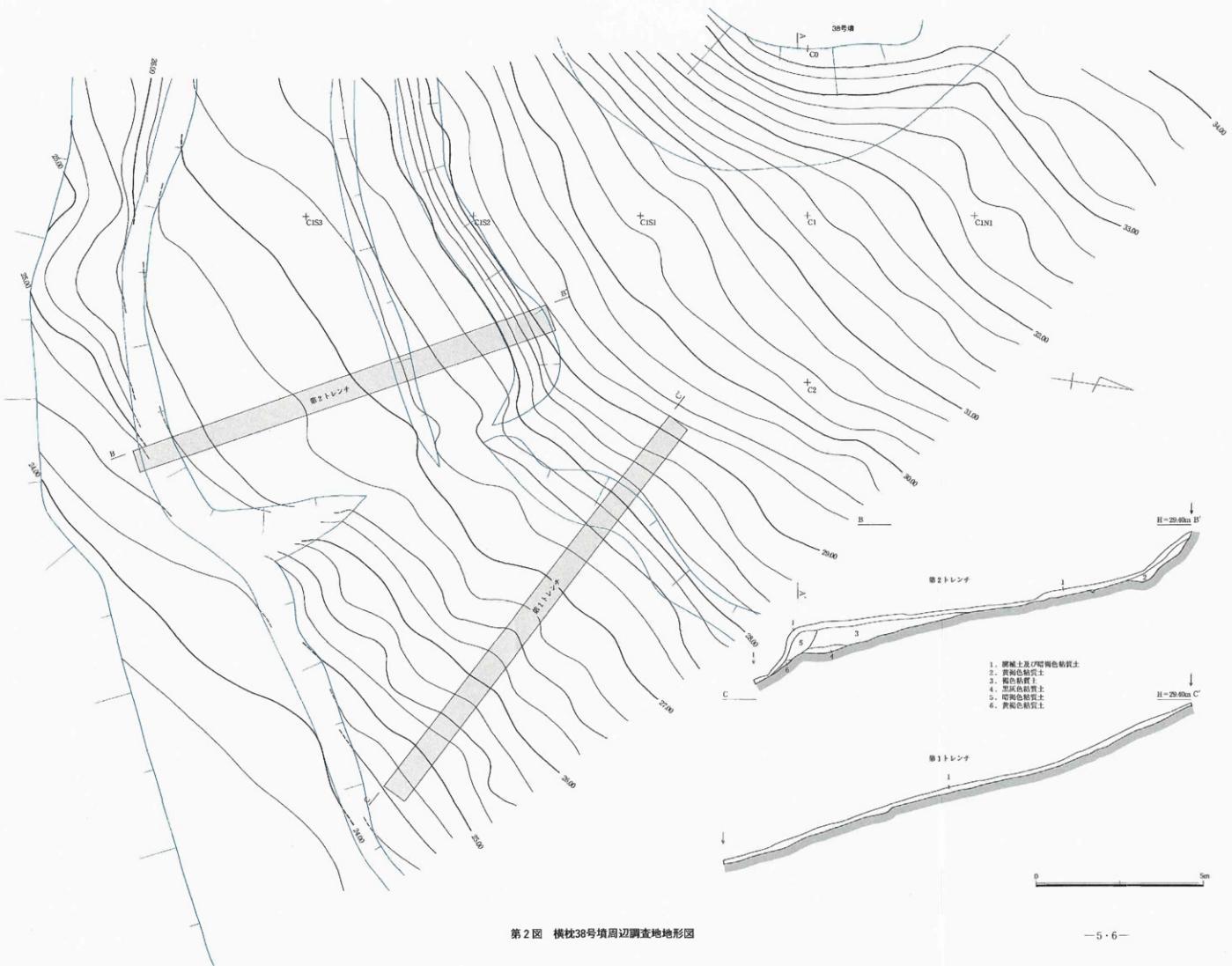
横枕古墳群は、横枕集落の北側後背丘陵、東側独立丘陵周辺にいくつかの支群を形成しながら現在までに91基が確認されているが、まだ未踏査区域もあり詳細な分布調査で古墳の数の増加が予想されている。本古墳群では主に平成11年度以降の各種開発事業に伴って本格的な発掘調査が実施され、これまでに計50基もの古墳が調査されている。その結果、次第に本古墳群の様相が明らかとなり始めたが、あくまでも現在の行政区画に由来して便宜的に括られた本古墳群を一つの古墳群として取扱ってよいか注意を要する点も指摘されている。

これまでの調査によると、古墳時代前期の古墳は主として各支群中の尾根上に方墳として形成され、埋葬施設は基本的に木棺直葬の形態をとる。前期末から中期前葉に該当する古墳は今のところ確認されておらず、中期中葉頃から尾根上の前期古墳の下位に円墳が形成される。埋葬施設は主として木棺直葬の形態をとり、中心主体以外に僅かに石棺等が認められる。後期になるとさらにその下の尾根上、丘陵斜面、あるいは丘陵上の高標高地など、それまでの時期に造営された古墳を避け、とにかく空いた位置に主に円墳が築造されている。埋葬施設は中心主体は木棺直葬で、それ以外に僅かに石棺が認められ、後期後半に横穴式石室が導入される。終末期には丘陵裾部に横穴式石室を中心とする円墳が築造される。またこの古墳群の特徴として、埋葬に際して土器転用枕が多く使用されること、鉄製品が多く副葬されていることが指摘されている。

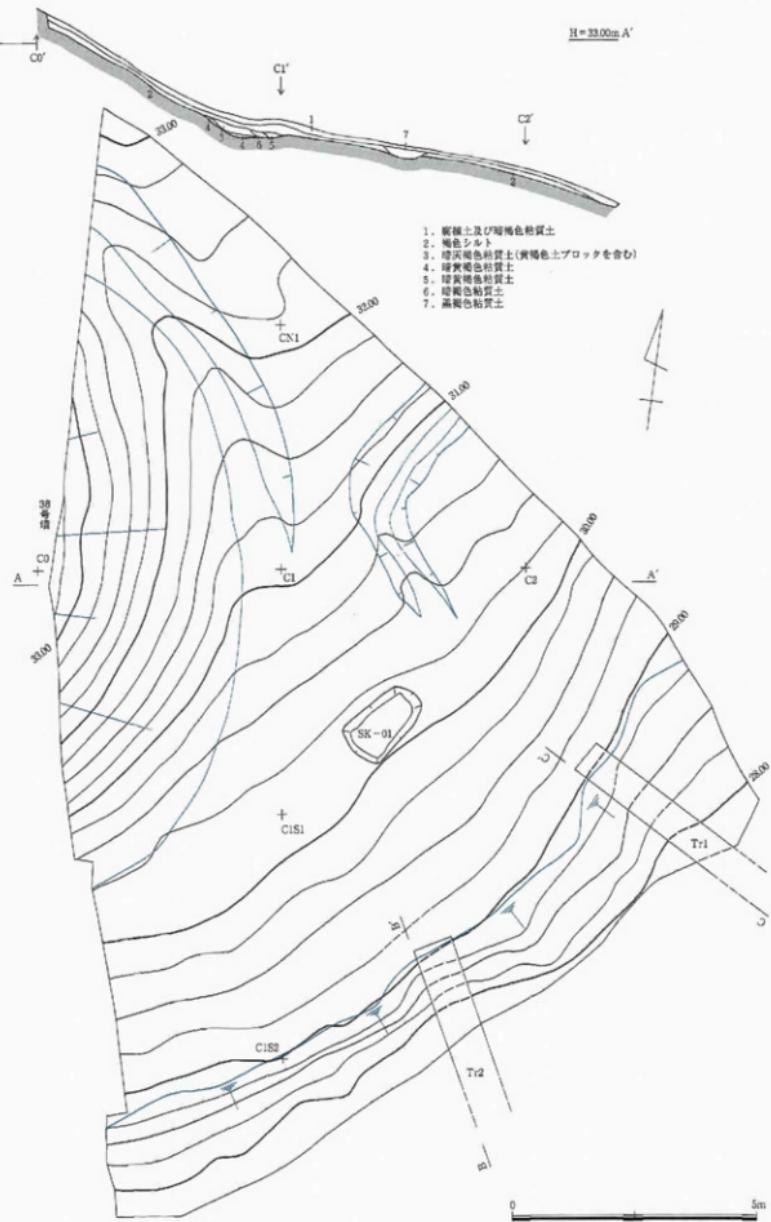
1. 横枕38号墳 (第2、3図; PL1、2)

1) 位置と現状 横枕38号墳は横枕集落の北東側、標高30m強の丘陵裾に位置し、その北東側に39号墳が造営される。南東に開ける畑・水田面からの比高差は8m程度である。周辺の丘陵裾には同様の古墳が点在しており、平成11年度には横穴式石室を内部主体とする56号墳が調査されている。調査前の状況は、その南東側前面がかつて畑地等として使用されていたようであるが、現在はその一部も含めて笠置や雑木林となっており、調査地の東から北側にかけての境界付近からその外部に植林がなされている。調査前の墳丘の遺存状況は良好で、東から南側では2m内外の高まりが認められる。なお今回の調査範囲は調査区の北西端部に位置し、古墳の東側墳丘斜面・周溝の一部が調査対象である。

2) 墳丘 墳丘は5~10cm程度の表土およびその下の堆積層である10cm程度の褐色シルト層の下から検



第2図 横枕38号墳周辺調査地地形図



第3図 横浜38号墳周辺調査地遺存図

出した。墳丘の築造は、前述の56号墳の例などと同様の地山整形と盛土によると考えられ、調査地内の低位にあたる南側以外に円弧状の溝を掘り込んで丘陵裾から切り離している。このことから今回の調査地内では古墳自体の調査範囲は狭いものの、本墳は、規模は東西径約15m、高さは東側墳裾から約2.8m程度の円墳と考えられる。

3) 墓葬施設・出土遺物等 前述のとおり古墳の調査範囲は狭く、墳頂部もほとんどかかっていなかったが、地内の墳丘斜面や周溝底について平面精査を行った。その結果、墳丘外から後述の新しい時期の遺構を検出した他は当該時期の墓葬施設やその他の遺構は周溝の一部以外には検出されなかった。

当該時期の遺物として蓋杯、高杯の細片や須恵器体部片が周溝埋土中から出土した他、同埋土中から繩文土器片1点も出土したが、いずれも細片で実測するには至らなかった。なお時期については、後期と考えられるが、これらの遺物も周辺からの混入の可能性も考えられることから正確なところは今後の中心主体等の調査の結果を待ちたい。

2. 横枕40号墳 (第4、5図; PL3、4)

1) 位置と現状 横枕40号墳は横枕集落の北東側、標高83~85m弱の丘陵上で、小さな尾根の分岐点付近に位置し、その西側に隣接する41号墳と2基で小支群を形成する。周辺水田面からの比高差は60m強である。調査前の遺存状況は、比較的良好で、東側墳裾からの高まりは2m強が見受けられ、尾根の高位側(墳丘の西側)には尾根を横断するかのような明瞭なカットが認められる。また墳頂部は平坦あるいは僅かに凹むことから、後世の削平を受けている可能性も考えられる。調査前の土地利用状況は、赤松と雑木の混合林である。なお今回の調査範囲は調査区の東端部に位置し、古墳の西側周溝・北側から東側墳丘斜面および墳頂部の一部が調査対象である。

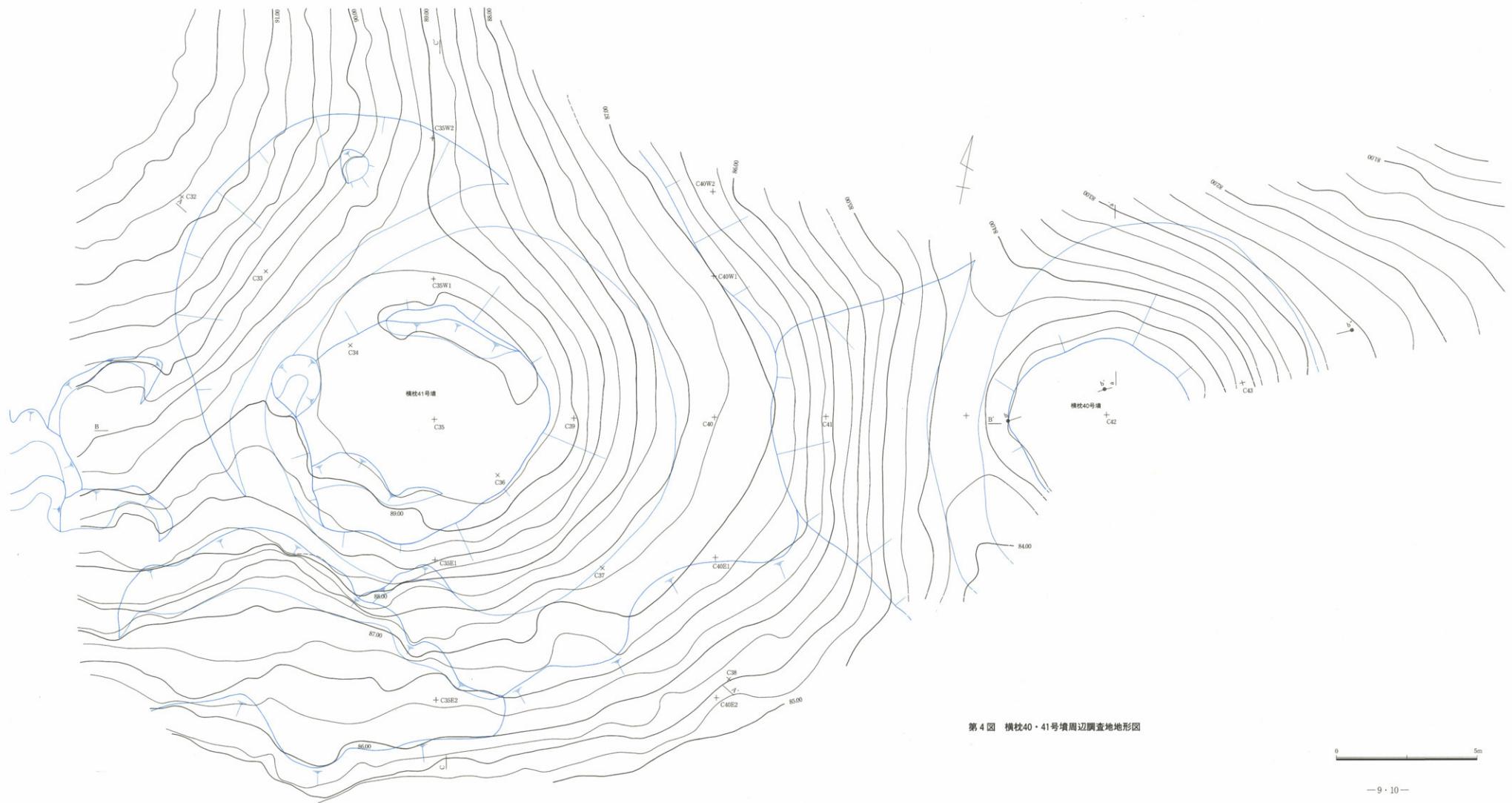
2) 墳丘 墳丘は3~5cm程度の表土下から検出した。狭小の調査範囲内ではあるが、築造は地山整形と盛土によってなされるものと考えられる。このうち地山整形としては、尾根の高位側である墳丘の西側を最大深2.9m、最大幅6m程度弧状に掘り込んで溝とともに墳丘部分を尾根から切り離している。他の部分については多くの部分が調査区外となるが、北側および東側裾部の観察から、その裾部を地山カットしていることが見受けられる。またこれらの裾部の上層観察から、溝と地山カットによって造り出された区画の高位側を若干削って低位側へ均すことで墳丘基底部とし、その上に盛土を行ったものと考えられる。したがって盛土は旧表土と考えられる第10(黒褐色粘質土)層上あるいは地山直上になされている。なお現段階ではあるが、本墳は、規模は東西径11.6m、北側墳裾からの高さ1.55m程度の円墳である。

3) 墓葬施設・出土遺物等 墳頂部の一部と墳丘斜面、周溝、墳裾テラス部等について平面精査を行った。その結果、周溝底からピット状遺構(P-1=長軸28cm×短軸ー×深さ19cm)を1基検出したが墓葬施設は検出できなかった。また当該時期の遺物としては、墳丘肩部、斜面、裾部から赤彩高杯片や須恵器体部片が出土したが、いずれも細片で実測するには至らず、これまでのところ本墳の築造時期は不明である。なお東北東裾部付近からやや浮いた状態で鉄製品1点が検出されている。

3. 横枕41号墳 (第4~7図; PL1、4~6)

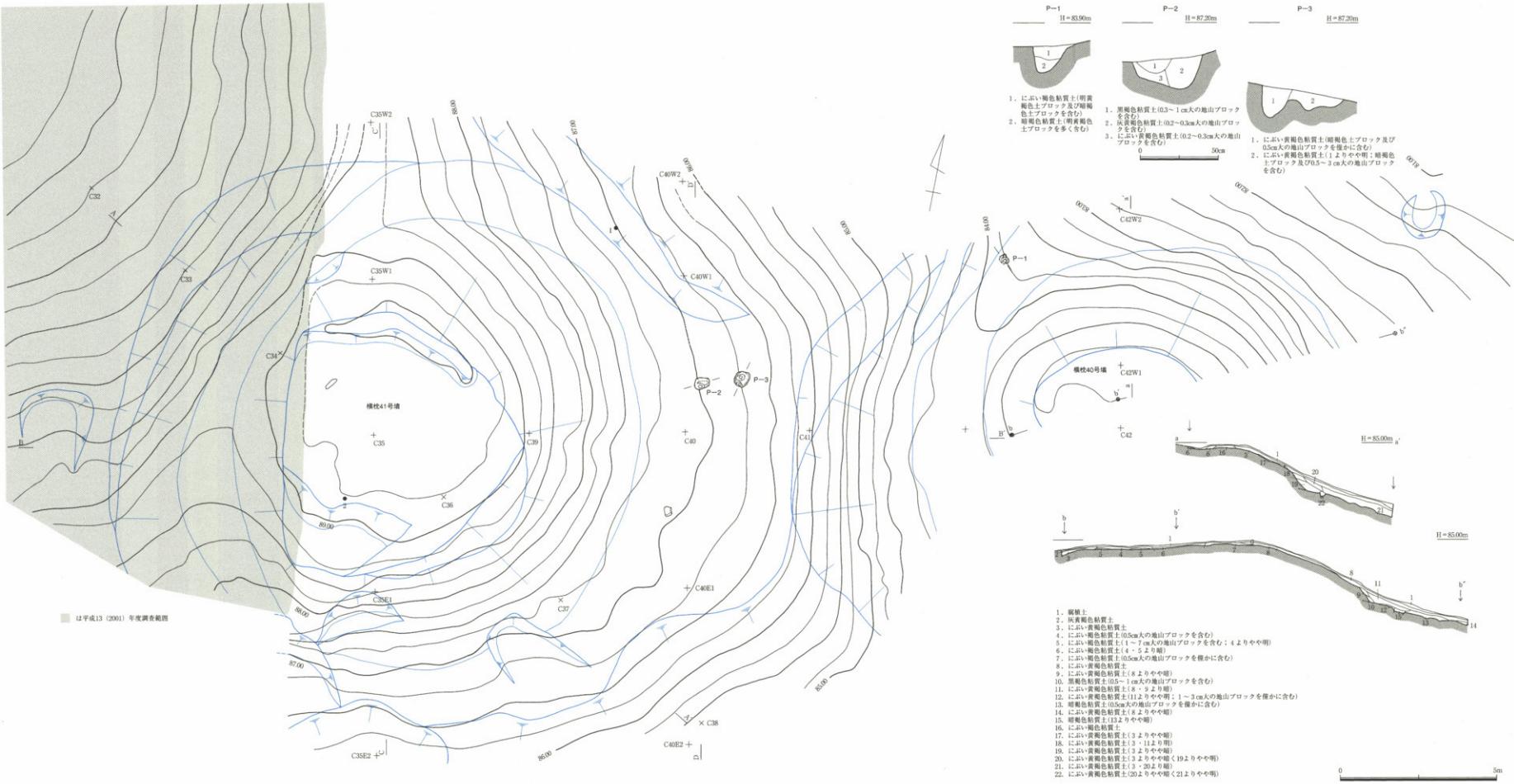
1) 位置と現状 横枕41号墳は前述のとおり40号墳の西側に隣接して造営され、標高は87m強~89.5m程度である。平成13年度に南西端部が調査され、既に造成によってカットされている。その他の調査前の遺存状況としては、13年度調査時より墳頂部の一部がやや崩壊していること等を除けば他は大きな変化は認められない。しかしながら、墳頂部はそれ以前の何らかの流失あるいは削平によって大きく抉られ、部分的に外輪山状の高まりが認められる。また墳丘の北側には以前の調査時に検出した周溝の延長部とみられるカット部分が明瞭に認められるとともに、東側にも比較的広い平坦部が認められる。なお調査前の土地利用状況は、40号墳と同様の赤松と雑木の混合林である。

2) 墳丘 墳丘は地山整形と多量の盛土によって築造される。このうち地山整形は、既報告と合わせて

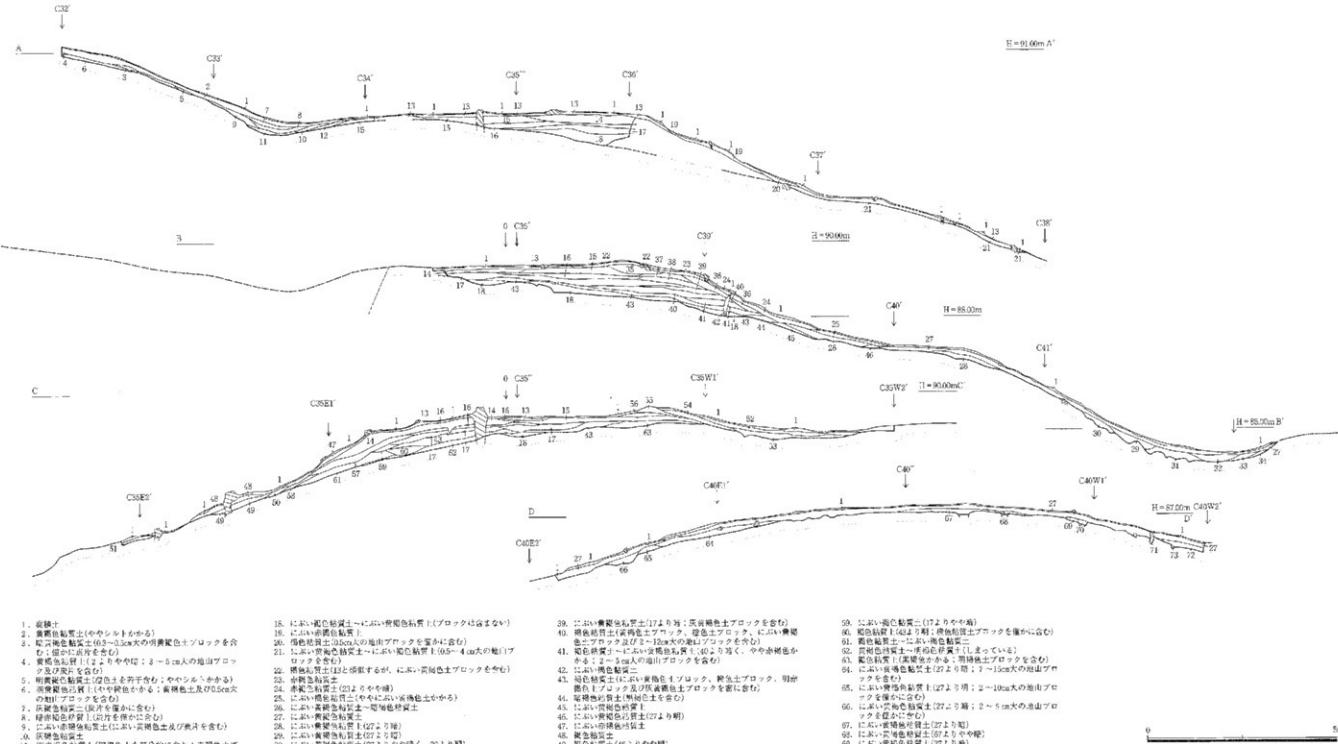


第4図 横枕40・41号墳周辺調査地形図

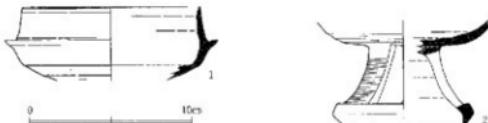




第5図 横枕40・41号墳周辺調査地遺存図及び横枕40号墳堆丘断面図、ピット状遺構断面図



第6図 横枕41号墳墳丘断面図



第7図 横枕41号墳出土遺物実測図

考えると、尾根の高位(北西)側を最大深1.5m、最大幅5.5m程度の弧状の溝を掘り込んで墳丘部分を尾根から切り離している。また他の部分についてはその裾部を地山カットして墳裾テラス部を形成するとともに、溝と地山カットによって造り出された円形区画の高位側を若干削って低位側へ均すことで墳丘基底部とし、その上に盛土を行っている。盛土は最も遺存状況の悪い尾根の高位(北西)側で約10cm、最も深く遺存する尾根の低位(東)側で80cm程度を測る。なお本墳は、墳丘規模は南北間で径12.3m、高さは東側墳裾からで2.1mを測る円墳である。

3) 埋葬施設・出土遺物等 畑葬施設は平面精査、墳丘断ち割り、盛土除去を行った結果、盛土以前に地山を掘り込むもの、あるいは遺存する盛土を掘り込んでいるものは検出されなかった。

当該時期の遺物として墳頂部南東および南西側盛土中から杯身や高杯脚部片が、また南東側墳裾部表土中から円形・長方形・三角形の透しをもつ脚台部片、北東および東側墳裾テラス部表土・流上中から平底底部片・体部片・杯身口縁部片・有蓋高杯片等が出土した。このうち北東側墳裾部中から杯身(1)、南西側盛土中検出の高杯(2)について図化した。杯身(1)は復元口径10.8cm、同受け部径13.0cmで、立上りはやや垂直気味に立上る。受け部は端部を短くつまみ出し、底部ヘラケズリは体部の1/2程度に認められる。高杯(2)は杯底部の一部と脚部の遺存であるが、短い脚部はハの字形に外反し、端部で外方に段をなしてから下方へ鉤形に曲げる。脚部にはカキ目を施し、台形状の透しを3方向に持つ。これらの遺物から、本墳の築造時期は古墳時代中期末から後期前葉頃で、平成12年度調査の横枕42、53~55、57、58号墳の支群と相前後して造成されたものと考えられる。

なお、墳丘の東側テラス部からピット状遺構2基(P-2=長軸48cm×短軸37cm×深さ21cm、P-3=長軸52cm×短軸46cm×深さ21cm)を検出したが遺物もなく詳細は不明である。

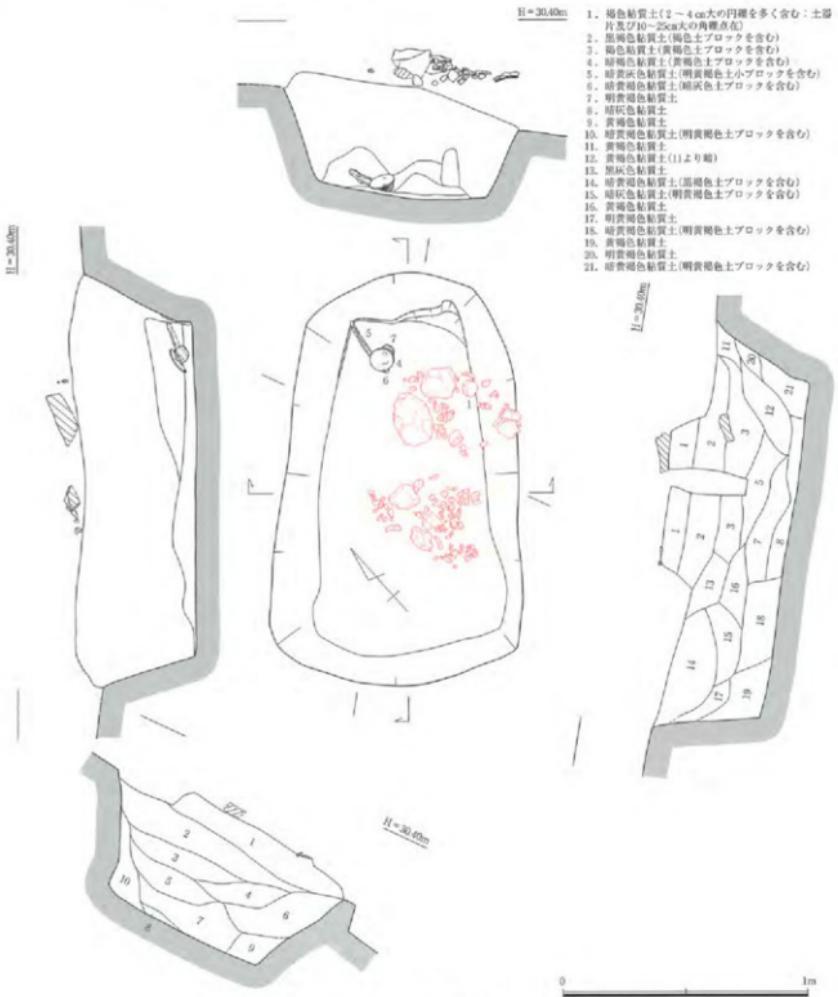
4. その他の遺構 (第8、9図; PL7~9)

今回の2か所の調査地内からは、丘陵上の調査区から前述のピット状遺構3基と、丘陵裾の調査区から土壤1基(SK-01)、溝状遺構1条を検出した。

1) SK-01 丘陵裾部の横枕38号墳の南東側の表土下から検出した埋葬施設と考えられる土壤で、平面形は隅丸長方形プランを基調としたとも考えられるが隅丸の長台形状を呈する。主軸はN42.5°Eにとり地山を掘り込む。断面は逆台形状で、規模は、長さ1.69m、幅1.03m、深さ0.53mを測る。

遺物は、最上層上面付近から10~25cm大の数個の角蝶と2~4cm大の多量の円碟、土師器(1、2)、詳細不明鉄製品が検出され、北隅側床面からはまとまって櫛(3)、鏡(4)、銭(5)、毛抜き状鉄製品(6)、小壺(7)、漆片、木繊片が検出された。墓壙上面検出の土師器(1)は、底径7.4cmを測り、調整はやや不明瞭ながら内外面ヨコナデと見られ、底部は糸切りである。(2)の土師器皿は、復元口径7.3cm、器高1.55cmを測る。内外面ともヨコナデで内面中央には後ナデが認められ、底部は糸切りである。墓壙内検出の横櫛(3)は片側端部のみの遺存であるが、漆の可能性が考えられる皮膜に覆われた最大厚4.5mmの櫛部分が厚みを減じながら緩やかに端部に向けて曲がる。歯は把部から削り出され、現存で計10本程度認められるが、1cmあたりに4本程度と目が粗く解釈と考えられる。その片面には板状の木片が付着して遺存する。菊花双鳥鏡(4)は薄い鏡胎で外傾するやや厚めの周縁を持つ直径10.6cmの小型鏡で、2羽の小鳥や菊花は花蕊座の紐を中心に回転対称の位置にある。周縁に部分的に纖維状のものの付着が認められ、布に包まれていたことが想像される。銭(5)は握り銭で、全長15.56cm、刃長8.5cm

を測る。毛抜き状鉄製品(6)は鉄板(棒)の両側をやや叩き伸ばしたものでU字形に曲げさらにその両先端部を内側に曲げた現代の毛抜きと同様の形態を持ち、遺存長は7.9cmを測る。青白磁の小壺(7)はつまみを持って外面に放射状の陽刻がなされた口径4.05cm・器高1.85cm・かえり径6.3cmの蓋と、外面に花弁を模したと見られる陽刻がなされた口径4.9cm・底径3.05cm・器高4.45cm・最大胴径6.05cmの壺のセットで、灰白色の胎土に青みがかった釉が外面にかかる。下端部から底面は無釉である。これらの遺物のうち(3)～(7)は、鏡の下に小壺、櫛、鉄、毛抜き状鉄製品が置かれるが、前述のとおり木細片や漆片がこれらの周辺から検出されていることから、床面上検出の遺物の総てあるいはその一部が、塗漆



第8図 SK-01実測図



第9図 SK-01出土遺物実測図

りの木製容器に入れられて埋納された可能性も考えられる。なお出土遺物から本土墳の時期は、平安時代末から鎌倉時代初頭頃と考えられる。

2) 溝状遺構 丘陵裾部、横枕38号墳の東側の表土下から検出した。溝の一端は調査区外へ伸びており、平面形は検出出現況で鉤形に曲がるが、全体としてはコの字形に曲がってその囲まれた中を周辺から切り離す区画溝の可能性が考えられる。断面は浅い皿状で、規模は、検出長5.3m、最大幅1.4m、深さ0.25m前後である。なお現在のところ明確に時期を示す遺物もなく、本溝の時期は不明である。

参考文献

- 鳥取市文化財団「鳥取市横枕古墳群Ⅰ」2002
- 鳥取市文化財団「横枕古墳群Ⅱ」2003
- 久保賀編『日本の美術3 中世・近世の鏡』至文堂、1999

PL. 1



1. 調査地遠景航空写真
(東南東上空から)



2. 横枕38号墳周辺調査地
遠景(南東から)



3. 横枕40・41号墳周辺調査地
遠景(北西から)



1. 横枕38号墳周辺調査地
調査前(東から)



2. 横枕38号墳周辺調査地
調査後(南南東から)



3. 横枕38号墳墳丘断面
(南から)

PL. 3



1. 横枕40号墳周辺調査地
調査前(南西から)



2. 横枕40号墳周辺調査地
調査後(西南西から)



3. 横枕40号墳墳丘断面
(北東から)



1. 横枕40号墳西南西側周溝部
断面(南東から)



2. 横枕40号墳北東側墳裾部
遺物出土状況(北東から)



3. 横枕41号墳周辺調査地
調査前(北東から)

PL. 5



1. 横枕41号墳周辺調査地
調査後(北東から)



2. 横枕41号墳墳丘断面[1]
(南西から)



3. 横枕41号墳墳丘断面[2]
(南東から)



1. 横枕41号墳出土遺物

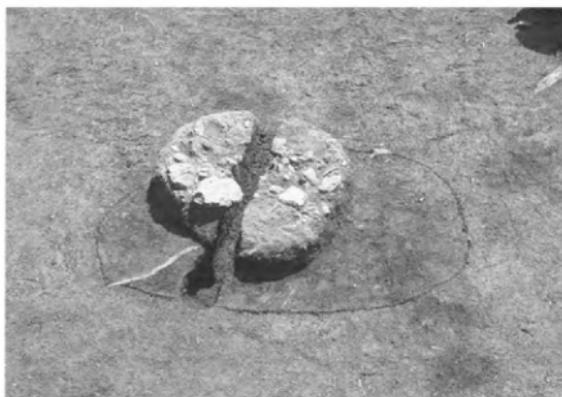


2. P-2 断面(上)、完掘状況(下)(北北西から)



3. P-3 断面(上)、完掘状況(下)(南東から)

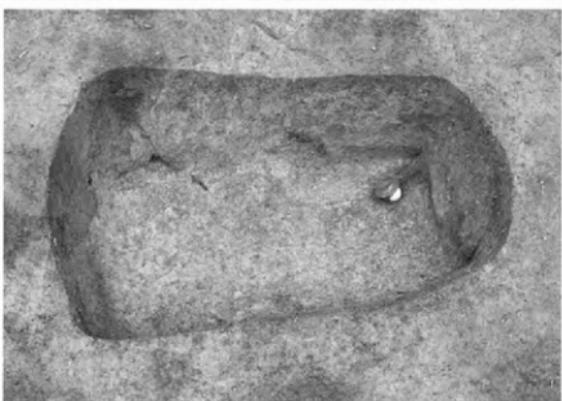
PL. 7



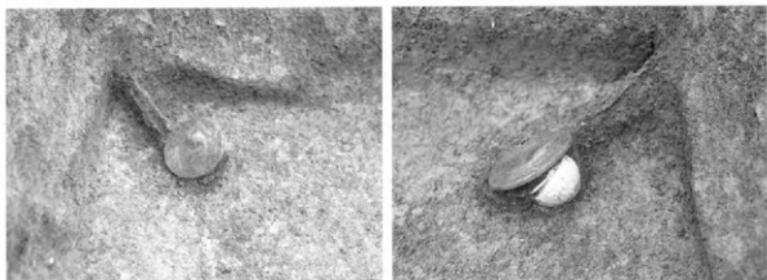
1. SK-01検出状況
(北西から)



2. SK-01縦断面
(南東から)



3. SK-01掘り下げ状況
(南東から)



1. SK-01内遺物出土状況(左／南西から；右／南東から)



1

2



2. SK-01出土遺物[1]

3



4



7



5



6

1. SK-01出土遺物(2)

報告書抄録

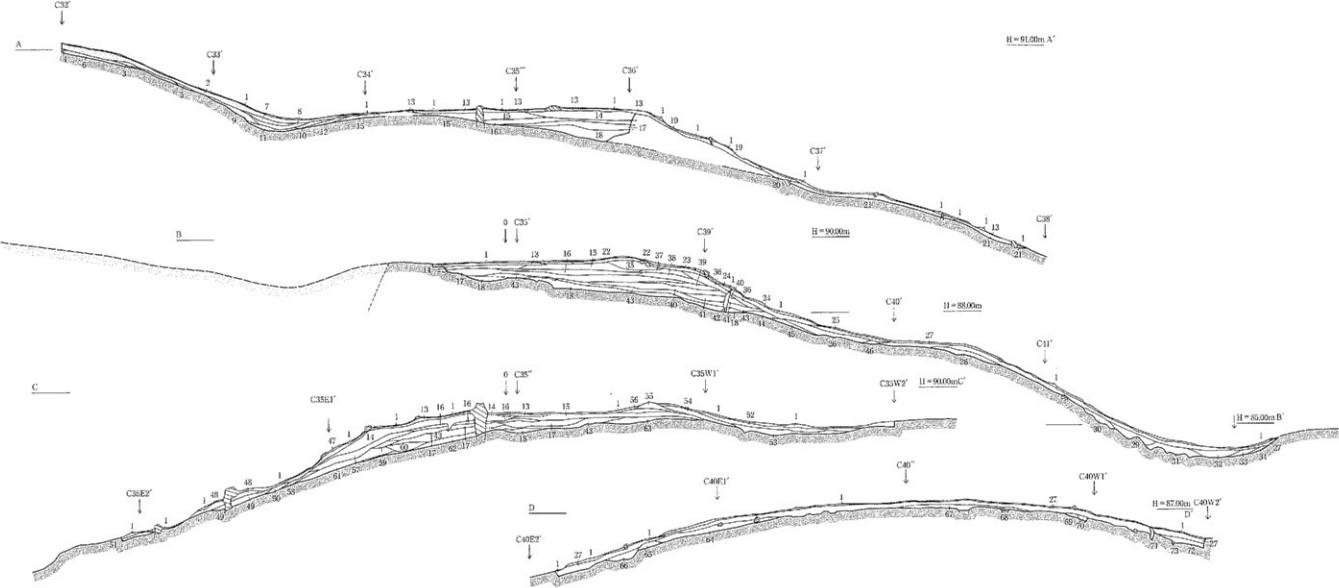
ふりがな	とっとりし よこまくらこふんぐんはっくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	鳥取市横枕古墳群発掘調査概要報告書							
調書名	姫鳥線整備促進関連事業に係る横枕38・40・41号墳の調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	山田真宏							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL (0857)23-2140							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横枕古墳群	鳥取市横枕	31201						道路整備促進関 連事業に伴う調 査
	38号墳			35° 27' 27"	134° 11' 36"	2003.11.25 ～ 2004.03.29	合計 795	
40・41号 墳				35° 27' 30"	134° 11' 32"	2003.11.25 ～ 2004.03.29		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
横枕古墳群	古墳	古墳時代 中期末～後期	古墳 3基 ピット 3基	土師器：高杯 須恵器：杯身、高杯、有蓋高杯、 脚台部 鉢製品				
	中世墓	平安時代末～ 鎌倉時代初頭	土壙 1基	土師器：皿、杯 瓶 鏡 鉄製品：鍔、毛抜き状鉄製品 青白磁：小壺				

鳥取市 横枕古墳群発掘調査概要報告書

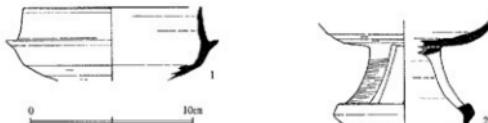
姫鳥線整備促進関連事業に係る横枕38・40・41号墳の調査

平成16年3月 印刷・発行

編集・発行 財團法人 鳥取市文化財団
印刷所 勝美印刷株式会社



第6図 横枕41号墳墳丘断面図



第7図 横枕41号墳出土遺物実測図

考えると、尾根の高位(北西)側を最大深1.5m、最大幅5.5m程度の弧状の溝を掘り込んで墳丘部分を尾根から切り離している。また他の部分についてはその裾部を地山カットして墳裾テラス部を形成するとともに、溝と地山カットによって造り出された円形区画の高位側を若干削って低位側へ均すことで墳丘基底部とし、その上に盛土を行っている。盛土は最も遺存状況の悪い尾根の高位(北西)側で約10cm、最も深く遺存する尾根の低位(東)側で80cm程度を測る。なお本墳は、墳丘規模は南北間で径12.3m、高さは東側墳裾からで2.1mを測る円墳である。

3) 墓葬施設・出土遺物等 墓葬施設は平面精査、墳丘断ち割り、盛土除去を行った結果、盛土以前に地山を掘り込むもの、あるいは遺存する盛土を掘り込んでいるものは検出されなかった。

当該時期の遺物として墳頂部南東および南西側盛土中から杯身や高杯脚部片が、また南東側墳裾部表土中から円形・長方形・三角形の透しをもつ脚台部片、北東および東側墳裾テラス部表土・土流中から平底底部片・体部片・杯身口縁部片・有蓋高杯片等が出土した。このうち北東側墳裾検出の杯身(1)、南西側盛土中検出の高杯(2)について図化した。杯身(1)は復元口径10.8cm、同受け部径13.0cmで、立上りはやや垂直直角に立上る。受け部は縁部を短くつまみ出し、底部ヘラケズリは体部の1/2程度に認められる。高杯(2)は杯底部の一部と脚部の遺存があるが、短い脚部はハの字形に外反し、端部で外方に段をなしてから下方へ鉤形に曲げる。脚部にはカキ目を施し、台形状の透しを3方向に持つ。これらの遺物から、本墳の築造時期は古墳時代中期末から後期前葉頃で、平成12年度調査の横枕42、53~55、57、58号墳の支群と相前後して造成されたものと考えられる。

なお、墳丘の東側テラス部からピット状遺構2基(P-2 = 長軸48cm×短軸37cm×深さ21cm、P-3 = 長軸52cm×短軸46cm×深さ21cm)を検出したが遺物もなく詳細は不明である。

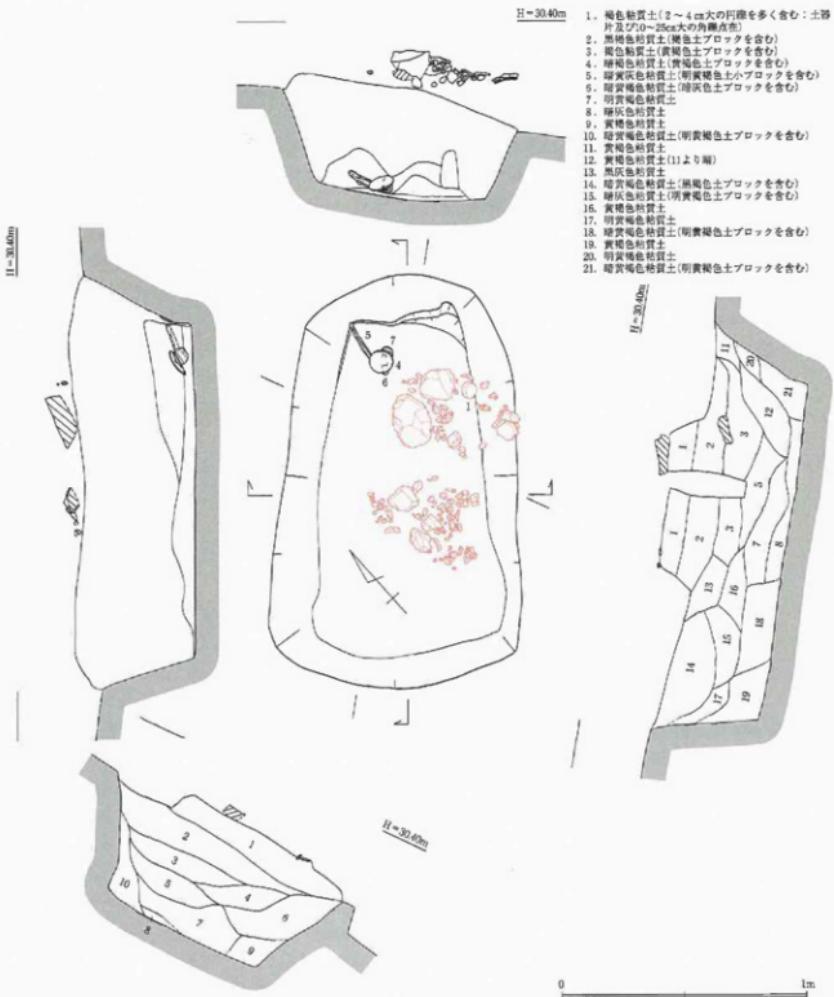
4. その他の遺構 (第8、9図; PL7~9)

今回の2か所の調査地内からは、丘陵上の調査区から前述のピット状遺構3基と、丘陵裾の調査区から土壙1基(SK-01)、溝状遺構1条を検出した。

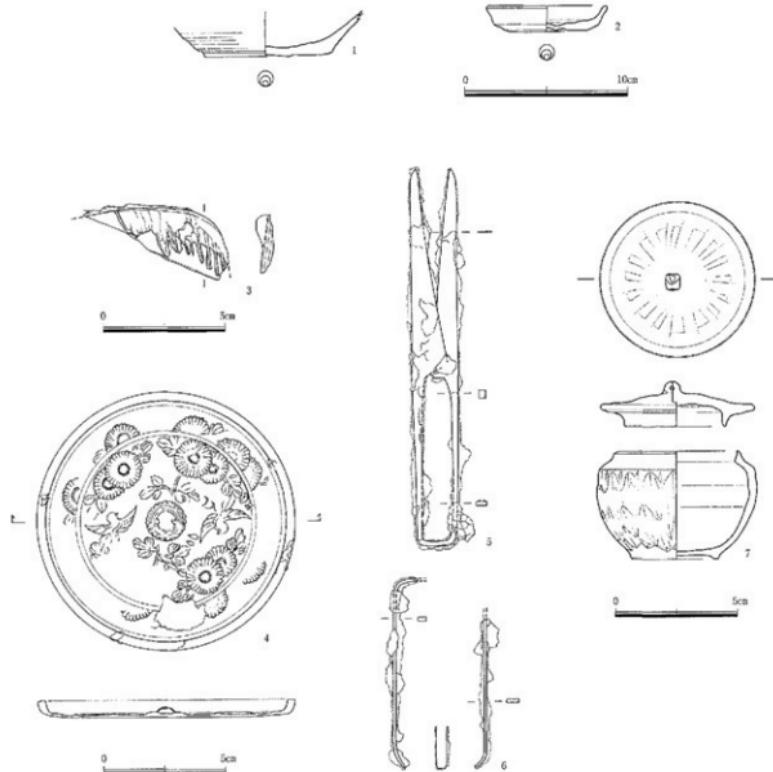
1) SK-01 丘陵裾部の横枕38号墳の南東側の表土下から検出した埋葬施設と考えられる土壙で、平面形は隅丸長方形プランを基調としたとも考えられるが隅丸の長台形状を呈する。主軸はN-42.5°Eにとり地山を掘り込む。断面は逆台形状で、規模は、長さ1.69m、幅1.03m、深さ0.53mを測る。

遺物は、最上層上面付近から10~25cm大の数個の角縁と2~4cm大の多量の円縁、土師器(1、2)、詳細不明鉄製品が検出され、北隅側床面からはまとまって櫛(3)、鏡(4)、鍼(5)、毛抜き状鉄製品(6)、小壺(7)、漆片、木繊片が検出された。墓壙上面検出の土師器杯(1)は、底径7.4cmを測り、調整はやや不明瞭ながら内外面ヨコナデと見られ、底部は糸切りである。(2)の土師器皿は、復元口径7.3cm、器高1.55cmを測る。内外面ともヨコナデで内面中央には後ナデが認められ、底部は糸切りである。墓壙内検出の横櫛(3)は片側端部のみの遺存であるが、漆の可能性が考えられる皮膜に覆われた最大厚4.5mmの棟部分が厚みを減じながら緩やかに端部に向けて曲がる。歯は把部から削り出され、現存で計10本程度認められるが、1cmあたりに4本程度と目が粗く解釈と考えられる。その片面には板状の木片が付着して遺存する。菊花双鳥鏡(4)は薄い鏡胎で外傾するやや厚めの周縁を持つ直径10.6cmの小型鏡で、2羽の小鳥や菊花は花蕊座の縁を中心に回転対称の位置にある。周縁に部分的に纖維状のものの付着が認められ、布に包まれていたことが想像される。鍼(5)は掘り鍼で、全長15.56cm、刃長8.5cm

を測る。毛抜き状鉄製品(6)は鉄板(棒)の両側をやや叩き伸ばしたものでU字形に曲げさらにその両先端部を内側に曲げた現代の毛抜きと同様の形態を持ち、遺存長は7.9cmを測る。青白磁の小壺(7)はつまみを持って外面に放射状の陽刻がなされた口径4.05cm・器高1.85cm・かえり径6.3cmの蓋と、外面に花弁を模したと見られる陽刻がなされた口径4.9cm・底径3.05cm・器高4.45cm・最大胴径6.05cmの壺のセットで、灰白色の胎土に青みがかった釉が外面にかかる。下端部から底面は無釉である。これらの遺物のうち(3)～(7)は、鏡の下に小壺、櫛、銅、毛抜き状鉄製品が置かれるが、前述のとおり木細片や漆片がこれらの周辺から検出されていることから、床面上検出の遺物の総てあるいはその一部が、漆塗



第8図 SK-01実測図



第9図 SK-01出土遺物実測図

りの木製容器に入れられて埋納された可能性も考えられる。なお出土遺物から本土襲の時期は、平安時代末から鎌倉時代初頭頃と考えられる。

2) 溝状遺構 丘陵裾部、横枕38号墳の東側の表土下から検出した。溝の一端は調査区外へ伸びており、平面形は検出現況で鉤形に曲がるが、全体としてはコの字形に曲がってその囲まれた中を周辺から切り離す区画溝の可能性が考えられる。断面は浅い皿状で、規模は、検出長5.3m、最大幅1.4m、深さ0.25m前後である。なお現在のところ明確に時期を示す遺物もなく、本溝の時期は不明である。

参考文献

鳥取市文化財団「鳥取市横枕古墳群 I」2002

鳥取市文化財団「横枕古墳群 II」2003

久保智康『日本の美術3 Na394 中世・近世の鏡』至文堂、1999

PL. 1



1. 調査地遠景航空写真
(東南東上空から)



2. 横枕38号墳周辺調査地
遠景(南東から)



3. 横枕40・41号墳周辺調査地
遠景(北西から)



1. 横枕38号墳周辺調査地
調査前(東から)



2. 横枕38号墳周辺調査地
調査後(南南東から)



3. 横枕38号墳墳丘断面
(南から)

PL. 3



1. 横枕40号墳周辺調査地
調査前(南西から)



2. 横枕40号墳周辺調査地
調査後(西南西から)



3. 横枕40号墳墳丘断面
(北東から)



1. 横穴40号坑西南西側周溝部
断面(南東から)



2. 横穴40号坑北東側鉛鉱脈部
遺物出土状況(北東から)



3. 横穴41号坑周辺調査地
調査前(北東から)



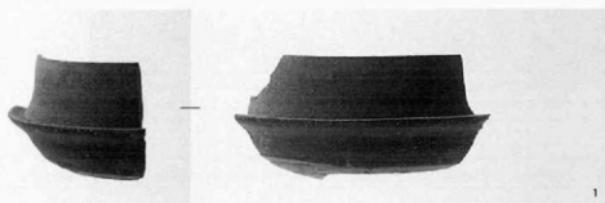
1. 横枕41号墳周辺調査地
調査後(北東から)



2. 横枕41号墳墳丘断面(1)
(南西から)



3. 横枕41号墳墳丘断面(2)
(南東から)



1



2



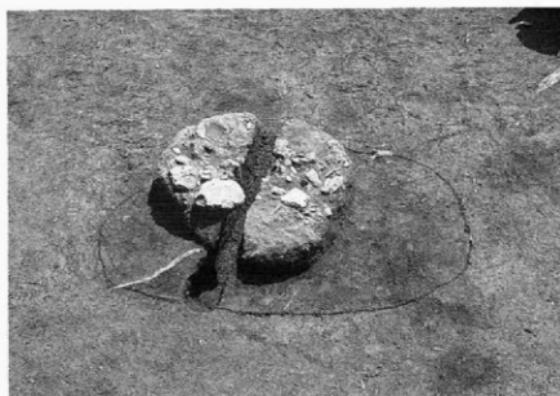
1. 横枕41号墳出土遺物



2. P-2断面(上)、完掘状況(下)(北北西から)



3. P-3断面(上)、完掘状況(下)(南東から)



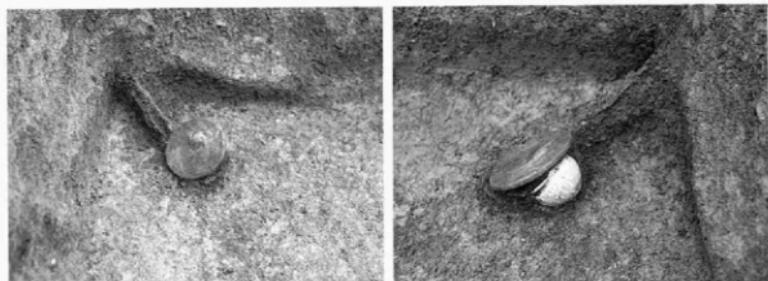
1. SK-01検出状況
(北西から)



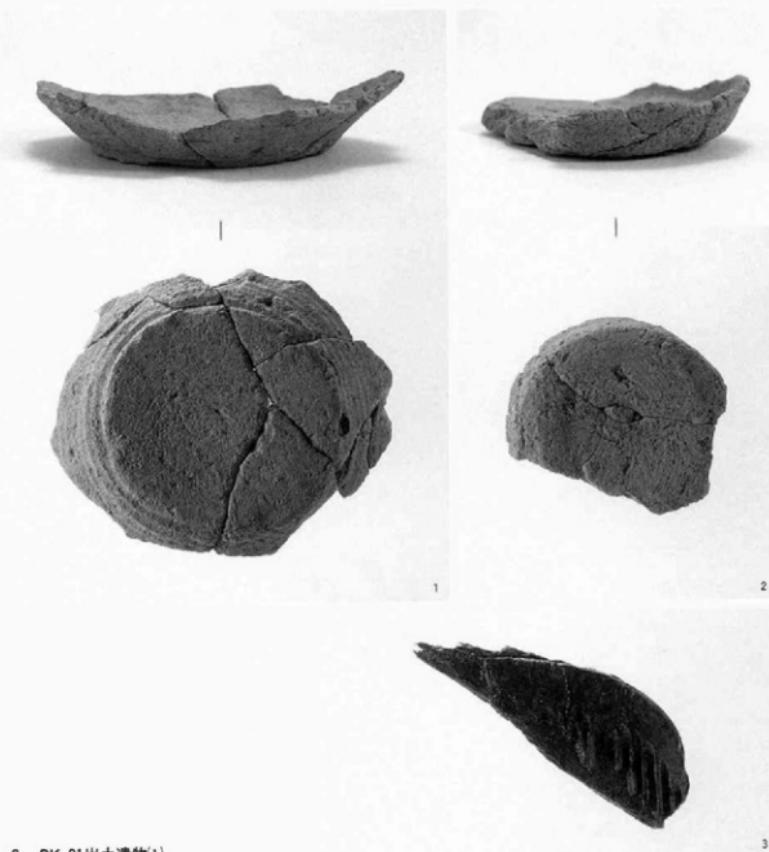
2. SK-01縦断面
(南東から)



3. SK-01掘り下げ状況
(南東から)



1. SK-01内遺物出土状況(左／南西から；右／南東から)



2. SK-01出土遺物(1)



4



7



5



6

1. SK-01出土遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	とっとりし よこまくらこふんぐんはくつちょうさがいようほうこくしょ							
書名	鳥取市横枕古墳群発掘調査概要報告書							
副書名	縦鳥線整備促進関連事業に係る横枕38・40・41号墳の調査							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
著者名	山田真宏							
編集機関	財団法人 鳥取市文化財団							
所在地	〒680-0015 鳥取県鳥取市上町88 TEL (0857)23-2140							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横枕古墳群	鳥取市横枕	31201						道路整備促進関連事業に伴う調査
	38号墳			35° 27' 27"	134° 11' 36"	2003.11.25 ~ 2004.03.29	合計 795	
	40・41号 墳			35° 27' 30"	134° 11' 32"	2003.11.25 ~ 2004.03.29		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
横枕古墳群	古墳	古墳時代 中期末～後期	古墳 3基 ピット 3基	土師器：高杯 須恵器：杯身、高杯、有蓋高杯、 脚台部 鉄製品	土師器：皿、杯 櫛 鏡 鉄製品：鉄、毛抜き状鉄製品 青白磁：小壺			
	中世墓	平安時代末～ 鎌倉時代初頭	土壙 1基					

鳥取市 横枕古墳群発掘調査概要報告書

姫鳥線整備促進関連事業に係る横枕38・40・41号墳の調査

平成16年3月 印刷・発行

編集・発行 財團法人 鳥取市文化財団
印刷所 勝美印刷株式会社
